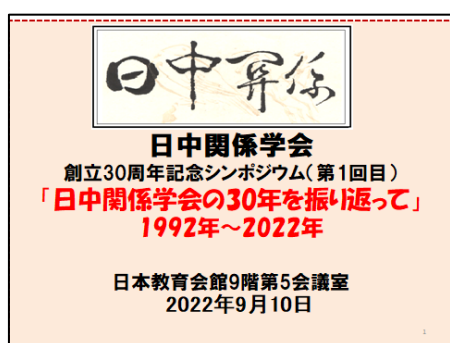


2022年9月10日開催 日中関係学会 30周年記念

## 「日中関係学会の30年を振り返って」シンポジウム 概要報告

2022年10月10日 日中関係学会事務局

以下の報告は、2022年9月10日（土）午後2：00より、東京一ツ橋・日本教育会館で開催された日中関係学会30周年記念行事の第1回目「日中関係学会の30年を振り返って」シンポジウムの発言者の概要を事務局で取りまとめたものである。



### 1. 司会（国吉副会長）より開会挨拶と企画の説明

コロナ禍以来、会員同士2年半の長きにわたりお互いに直接会えない時期が続いた。学会30周年イベントでは是非、対面しながら、学会30年の「過去を振り返り、未来へ」とする会を実現したい、との思いで企画した。しかし、実現一歩手前で、コロナ第7波の波に襲われ、開催が危ぶまれたが、感染もピークアウトしたことで、何とか会場開催+オンラインの「ハイブリッド」方式での開催ができたこと、大変うれしく思っている。

#### 日中関係学会30周年の意義について。

当学会は1992年9月12日に「日本日中関係史学会」として「発起人による設立」宣言がなされ、同年10月2日に第1回総会が神田・学士会館にて開催された。以後30年間、名称こそ1999年に「日本日中関係学会」、2022年に「日中関係学会」と若干の変更があったが、一貫して、

民間の立場から「良き日中関係」を目指す議論のプラットフォーム構築を目指して活動が続けてきた。個人参加と会員制を柱に、事務局体制も手弁当で築き上げた団体が30年の長きに渡ってこうして活動を続ける事が出来たのは、大変なことと思う。すべて、先人・先輩諸氏のご尽力で、ここまで築き上げられた成果の賜物と心から感謝している。

当学会の活動は、個々の会員が中国に対して様々な考えを持つことを尊重し、特定の思想やイデオロギーに偏することなく、学術・文化・教育・経済・政治等幅広く、中国・中国人との良好な関係を作り上げていくものとしてきた。もちろん、時代、時代で政治による影響を受けることもあったが、決してそれに流されることなく、ここまで初心貫徹してきた。

今回、「設立30年」の節目に、これまでの研究会では余り取り上げる事の無かった「学会の歴史」を取り上げ、我々自身を見つめ直す機会にしたいと考え、開催に至った。

揺れ動く世界と日中関係の中にあつて、我々の「立ち位置」は難しくなっている現状がある。後の話にもあるように、初代中江要介会長が学会機関紙 Newsletter 創刊号の中で以下述べている；

「当会は『日中友好』を謳わない。それには訳がある。当会は日中友好のためのものではなく、日中関係のためにあるものだからである。どのような日中関係が構築されるかは我々一人一人の肩にかかっている。我々に求めるものは広く、深いのである」

この言葉の意味は重い。「日中友好」は初めからそこにあるものではなく、「日中関係」に深く思いを致した結果として、様々な意見の相違を乗り越えてたどり着くことが出来る、との思いと理解し、先輩諸氏のこれまでの活動に改めて敬意を申し上げる。


今回の「30周年記念」第1回目は「日中関係学会の30年を振り返って」と題して、当学会30年の発展の経緯を振り返り、今後の10～20年の発展の糧となるものを見出していききたい。「踊り場」という言葉があるように、階段の「踊り場」は次の階に上るためのステップの階である。今年30年目をそうした節目と考えたい。後ほど、ご尽力頂いたシニアの皆様からの報告があるので、しっかりと耳を傾け、また同時に、若い人の意見も発表頂くので、しっかり伺いながら、今後当学会がどうあるべきかご議論頂きたい。

第2回目シンポジウムは、10月5日（水）午後6：30より神田・学生会館において、「鼎談～3人の元外交官が語る揺れ動く世界と今日の日中関係の在り方」と題して、元外交官の3人の賢人にお集まりいただき、最新の世界情勢とその中における、中国、そして日本の在り方について議論を戦わせて頂く予定である。

## 2. 宮本雄二会長の挨拶

### 2. 会長挨拶

宮本雄二 会長



福岡県出身。1969年京都大学法学部卒業後外務省入省。1990年アジア局中国課長、1994年 在アトランタ日本国総領事、1997年在中国日本大使館特命全權公使、2001年 軍備管理・科学審議官、2002年駐ミャンマー特命全權大使等を経て2006～2010年 在中国日本大使館特命全權大使。退官後2010年より日中関係学会会長。近著に『日中の失敗の本質-新時代の中国との付き合い方』(中公新書ラクレ2019年)等。

日中関係学会30周年をお祝い申し上げます。

2010年に私が会長に就任させて頂いて今年で12年になる。当時、藤村、江越両先輩より要請を受け、北京からの帰任早々に就任したいきさつがあるが、振り返ってみると初代会長の中江要介さんからの「宮本、いいじゃないか」の言葉が就任決意の決め手になったと思う。

外務省時代、私がまだ駆け出しの頃、中江さんはアジア局参事官であったが、並みの外交官

ではない印象を受けており、私が尊敬する何人かの外務省の先輩の中の一人であった。

日中航空協定締結に関して、台湾との関係をどうしようかと外務省の皆が悩んでいる時、ある土曜日の夜、中江さんに決済を伺いに行くと、一言「簡単なことだ。台湾の飛行機を名古屋に行かせればいい」と言われた。まさに「コロンブスの卵」だった。こういうことが出来るのが中江さんだったし、色々な意味で尊敬していた。

その中江さんが設立されたのが日中関係学会で、その時言われたていた言葉が「当会は

『日中友好』を謳わない」という言葉である。1972年の国交正常化当時の世代の人々にとって、「日中友好」は「不戦」と「平和」という充分の意味があった。しかし、天安門事件後の新しい日中関係をどうするかという、中国に対する姿勢の見直しの時期に、中江さんからこの言葉が出たもので、それは当時においては間違っていなかったと思う。しかし、時代の変化とともに、そうした言葉も検証していかなければならない。今はどうあるべきは、皆さんで考えて欲しい。

今の会は、皆さんが主体になり、ボランティアで続けている会で、真摯な努力には敬意を表したい。今後の30年に向けて、新しい日中関係をどのように発展させるか、若い人を巻き込んで、皆さんで考えて頂きたい。

### 3. 基調報告「日中関係学会30年の歩み」： 藤村幸義 当学会監事・前副会長

(詳細は添付1のPDF資料を参照)

今回、昔の写真を集めるのに少々苦労をしたが、最初のスライドは貴重な1枚の写真で、1989年北京の民族飯店内のレストラン「四季」で開催された「水交会」という勉強会(北京駐在の各社メンバーの勉強会)の記念写真である。当時三洋電機駐在員の川西重忠さんが発起人で、私が第1回目の講師を務めた。このメンバーが日本に帰ってから作っ

た会が「日中関係学会」という事になる。そういう訳で、当時の発足時の豪華なメンバーは、いわば川西さんの人脈とも言える。

その後、ホップ・ステップ・ジャンプで発展し、一時会員が600名になった時もある。なぜここまで発展できたかと考えれば、学会の役割の明確化、事務局体制の確立、多くの会員を多角的に呼び込んだ、情報発信の強化などがあげられる。

中江要介初代会長は「当会は『日中友好を謳わない』という表現を、学会機関紙Newsletter 創刊号で述べている。また、1999年に現在のキャッチフレーズである「21世紀の日中関係を考えるオープンフォーラム」というのがあるが、これは当時私が作ったものである。その後、中江精神を第2代福川会長、第3代宮本会長と引き継いで頂いて今日がある。


一方の事務局体制だが、これまでの一人では事務局体制は難しいという事で、1998年に、佐藤保、丹藤佳紀、川西重忠、藤村幸義の4名体制にした。

他方、2000年に北海道支部、2001年に九州支部が加わったものの、遠距離であることがネックで、2008年、2011年には相次いで離脱した。北海道と九州が入った時の会員数は約600名を超えていた。

## 3. 基調報告

### 「日中関係学会30年の歩み ～多くの方々に支えられて」

藤村幸義様  
監事・前副会長、拓殖大学名誉教授、  
元日本経済新聞論説委員



1944年ソウル生まれ。1987年に日本経済新聞社北京支局長を経て、1993年に論説委員。2001年から拓殖大学国際学部教授。2007～2009年拓殖大学国際学部学部長。現在、拓殖大学名誉教授、翰墨書道会副会長、日中関係学会監事。著書に『アジア経済に未来はあるか』(東洋経済出版社1997年)、『老いはじめた中国』(アスキー新書、2008年)、『中国ハブル経済のからくり』(勤草書房、2012年)など多数。

ところがその後、事務局の皆さんも大変忙しく、川西さん一人が担う時期もあったが、2011年に宮本体制に変わった機会に事務局体制も刷新し、11名体制に拡充を図り、いくつかの機軸を設けることで、次の発展の基礎を築いた。

それは①若者を呼び込むこと、②中国の研究者を呼び込むこと、③旅行好きを呼び込む、④ビジネス関係者を呼び込むことの4つとしたが、これが今の宮本賞、青年交流会、国観智库との国際交流、出版物、中国ビジネス事情研究会等いくつかの新しい取り組みにつながっている、2019年以降の新体制では、コロナ禍の中、ZOOMを積極的に活用し、遠隔地交流の充実を行うなど、コロナに負けない体制作りを行っており、今後が大いに期待される。

#### 4. 東海日中と関西日中の歩み

### 4. 東海日中と関西日中の歩み



東海日中関係学会会長 川村範行様(当学会副会長)  
1974年早稲田大学第一政経学部卒、同年中日新聞社入社、1995年中日新聞・東京新聞上海支局長 2003年中日新聞東京本社論説委員 2011年中日新聞社長室次長 2011年～2021年名古屋外国語大学外国語学部教授 2021年～同大学名誉教授



関西日中関係学会会長 伊藤正一様(当学会副会長)  
関西外国語大学 教授、前 関西学院大学 副学長  
京都大学大学院経済学研究科 博士号取得  
フシントン大学大学院経済学研究科 Ph.D 取得

(司会) 支部組織としての東海と関西からのご報告を頂く。「支部」と表現したが、東海日中と関西日中は本部組織設立後 1～2年で相前後して発足した独立組織で、地域的特性もあり、それぞれ東海日中関係学会、関西日中関係学会として独自の発展をしてきた。その設立から今日までの流れを、東海日中・川村会長、関西日中・伊藤会長よりそれぞれ報告頂く。

#### 東海日中関係学会 川村範行会長

(詳細は添付2のPDF資料を参照)

東海日中の歩みを報告する。「日中関係史学会」の東海支部が設立されたのは、1993年7月で、祝賀会の折、当時名古屋学院大学の学長をされていた西村嵩夫氏(故人)を支部会長に選出し、東京からも中江要介会長他がお出でになった。記念講演は京都大学竹内実名誉教授に「日中関係における文化と経済」というテーマでお話し頂いた。発足当時の事務局は浅井加葉子氏(事務局長・故人)と原田泰浩氏が担当した。本格的活動は1994年4月からで、名古屋に中国人民政治協商会議全国委員の王蒙氏を呼び講演会を開催した。その後、学会全国大会や北京シンポジウムに東海からも人を派遣し、活動を活発化する中で、1996年には名古屋で初めて学会全国大会を開催した。

その間、一時的に運営資金が不足するなど苦勞をしたが、会員数は確実に増加し、1995年のデータによると、全国会員数157名の内、東海が66名と、42%を占めたこともある。

学会名称を「日本日中関係学会」と変更した90年代後半には、本部と支部の関係を巡っていくつかの議論が起こり、「支部の主体性、自主性の尊重が学会発展のために不可欠」として東海支部の正式名称を「東海日中関係学会」とすることが了承された。

2000 年以降は国際シンポジウムの開催を東海独自で、或いは東京との連携によって開催してきた。コロナ禍の 2021 年にもピンポン外交 50 周年記念シンポジウムを名古屋の会場とインターネットを結んだ初めての会議として実施した。それ以外でも、東海日中としての訪中団を 2017 年に北京へ派遣し、外交部や中国社会科学院日本研究所との間で交流を行った。

現在の会員数は 80 数名だが、今後且つての 100 名前後までどのようにして拡大するか、課題である。また東京とのコミュニケーションもオンラインセミナー等を通じて積極的に交流すること等、進めている。




## 関西日中会長 伊藤正一会長

関西日中の誕生は、関西第 3 代会長の安井三吉さんが寄稿文に書いておられるように、1992 年 10 月であり、ほぼ本部と同じ時期である。初代会長は京都大学の竹内実名誉教授が就任された。ここに至るまでには東京からも元三洋電機の川西さんを始め、様々なサポートを頂いた。その後、2 代目は原田修さん、3 代目は安井三吉さん、と続き、4 代目が松下電器の青木俊一郎さんとなつたり、私で 5 代目になったが、この間の流れとしては、ビジネス界との交流がある。竹内実先生は初代会長として活動しながら、三洋電機の川西さん等を通じて関西のビジネス界の方々と親交を深め、その後ビジネス出身の原田修さんが 2 代目の会長になられた。その後、3 代目は中国歴史研究の安井さんへとつながったが、4 代目では松下電器出身の青木さんへつながるといふ変遷を経た。

会員数は、当初はビジネスマンの方が多く、一時は 100 名を超える時期もあったが、現在は 80 名前後、研究者、ビジネスマンを含め、経済、政治、文化等幅広く活動を続けさせて頂いている。

## 5. 「日中関係学会と私」～学会 30 年の発展にご尽力頂いた皆様からの発言

**5. 「日中関係学会と私」**  
～学会30年の発展にご尽力頂いた皆様からご発言、並びにメッセージを頂きます

①会場ご発言者	
	<p><b>江越眞様</b>：当学会監事・前副会長、元監査法人トーマツ代表参与、監査法人アヴァンティア顧問。福井県出身、1966 年中央大学卒業、1968 年監査法人トーマツに 1 期生として入社、78 年から中国担当、以来、西村あさひ法律事務所、(株)ケア・サービス、監査法人アヴァンティアで中国財政部との交流継続。</p>
	<p><b>大久保勲様</b>：当学会元顧問、HP「中国Now」コラム執筆、東京都出身、1961 年東京外国語大学中国語科卒業、同年東京銀行入行、1971 年日中貿易貿易事務所北京駐在員事務所出向、東京銀行北京駐在員事務所長、理事・中国部長、東京三菱銀行駐華総代表等を歴任、2001 年福山大学経済学部教授、現在名誉教授</p>
	<p><b>石井幸孝様</b>：当学会元顧問、九州中国研究会顧問、東京都出身、1955 年東京大学工学部卒業、同年国鉄入社 1986 年九州総局長を経て、1987 年 JR九州初代社長 に、その後博多アース国際航空ビル建設等九州の観光化に貢献。</p>

(司会)「日中関係学会と私」というテーマで、日中関係学会の組織をけん引頂いたシニアの皆様から、自らの中国の経験と日中関係学会との関係など、「是非残しておきたい」というお話を伺わせて頂きたい。なお、シニアの皆様からは、「寄稿文」として多くの方々から寄稿が寄せられているが、今回は、時間の制約もあり東京の会場から 3 名、関西、東海からはオンラインで各 1 名ご発言頂く（なお、

東海から参加予定の原田泰浩様は昨日急に体調不良になられ、ご発言を辞退された）。

## **江越眞様 : 当学会監事・前副会長、元トーマツ代表参与**

私は10回目の節目を迎えた宮本賞を通じて、次の世代へのメッセージとし、受賞した若者の皆さんに、将来を託したいと思う。この10年間で600名に上る若者が自らの論文を通じて真剣に日中、或いは東アジアの関係を考えるきっかけを作ってくれた。このことを私は非常に誇らしくに思っている。宮本賞を通じて若者の相互理解が進んだことに敬意を表したい。現在、世界は様々な問題が起こっているが、今ほど両国の若者の知恵と信念が求められている時代は無い。

自分の経験で申し上げますと、43年の日中交流の間、何度も挫折をしそうになったことがあるが、都度それを支えてくれたのは、その時のトップの言葉だった。中国の文革が終わり、これから「改革開放」だというときに、トップからは「江越！中国は、日本企業が進出するに当たり、会計と税の分野の環境がお粗末なので少しでもトーマツがお手伝いしよう」との言葉があった。

43年間で大きな節目は1980年代で2回あった。最初は、1981年トーマツ第1回訪中団で私は秘書長を務めたが、通訳として同行して貰ったある政治家の秘書が、その後1週間後に来日した日中友好協会の幹部クラスの女性通訳を「拉致」という問題が発生し、スキャンダルとして「サンデー毎日」に取り上げられた事がきっかけで、トーマツの中で、中国担当幹部が早々と中国担当を離れる、という問題が発生した。

もう1回は、1989年天安門事件の後、6/6～8東京と大阪で対中投資促進フォーラムが開催されたが、このフォーラムには財務部・国家税務総局他8名の幹部の来日が1年も前から準備がされていたが、北京の天安門広場での混乱が続く中、トーマツ幹部からフォーラム中止の要請があった。しかし、「こちらから開催を提案した以上、先方から出席できないとの連絡が来ない限り、こちらから断ることは信用に関わる」と主張し、フォーラムの開催を粛々と進め、その後の財政部との交流拡大に大きな成果があった。

今後、宮本賞受賞者の皆さんには、仲間の絆を強め、信念と覚悟をもって新たな日中関係の構築に邁進して頂きたい。是非とも次の世代を宮本賞の仲間たちに任せたいと思う。

## **大久保勲様 : 学会元顧問、元東京銀行（現在、三菱UFJ銀行）中国総代表**

私は1961年に大学を卒業し、当時の東京銀行に入行した。1971年1月に、日中覚書貿易事務所駐北京事務所に赴任したが、その時の責任者は岡崎嘉平太先生であった。赴任前の3ヶ月間、岡崎先生にご指導頂いた事は「君たちを北京に派遣するのは、事務を執るためではない、中国を見る事、知る事を仕事の第一と心掛けよ！」との厳しい一言であった。

私は北京赴任に先立ち、自民党国会議員の松村謙三先生のご自宅を訪問し、赴任のご挨拶をした。厳しい日中関係の中で、松村先生の訪中は1959年10月の第一次から1970年の第五次まであり、第一次訪中で一行は40日間にわたり中国各地を訪問したが、松村先生は日中関係正常化を終生の悲願とする決意を固めて帰国した。1962年の第二次訪中では、周恩来総理と松村先生との間で、新しい貿易構想が合意され、続いて訪中した高碓達之助先

生と廖承志先生との間で「高碕達之助・廖承志覚書」が調印された。これが長期、総合、大型の LT 貿易で、1968 年には一年ごとの覚書貿易 (MT) になった。

一方、私が勤務した東京銀行には、1957 年頃大蔵省から、台湾に拠点設置の意向があれば認めると連絡がきた。東銀は熟慮の結果、将来中国本土への進出を優先的に考えており、台湾への拠点設置は行わない旨伝えていた。

LT, MT 事務所は日中国交正常化につながり、東銀は台湾に拠点を設けなかったことで、世界の民間銀行で最初の外銀北京事務所、北京支店開設につながった。国レベルにしろ、企業レベルにしろ、特に中国の場合、鋭く先を読むことの大切さを改めて感じた。

ところで、東銀は、何でも中国の言うとおりにしていたわけではない。1990 年 2 月、当時の頭取が特に日本企業の便宜のために、台北に支店を作りたい、その前段階として駐在員事務所を設けようと決意したが、中国側からは同意できない旨表明があった。中国側の反発は強く、中国側金融機関とは、会うことすら難しくなったが、1 年あまり真意を伝える懸命の努力を行い、日本政府の協力も得て解決した。この時中国課長であった宮本大使には大変お世話になった。この間、真摯な交渉を経て、中国人民銀行をはじめとする中国側との関係は、以前に増して親密になり、1995 年 7 月外銀として世界で最初の北京支店を開設することができた。

日中関係学会は、これまでの諸活動を通じて、中国を知る努力を続けてきた。訪中の機会や中国側との意見交換の場も、何回か設けられたが、これらの活動は大変有益であった。

日中国交正常化 50 周年に当たり、私は、日中関係学会として改めて中国を深く知るための努力をさらに推し進めることを期待している。且つて、北海道支部開設の折 (2000 年頃)、中江要介会長とともに、北海道で講演し、その時「中国は大きな問題を抱えているものの、2000 年に中国の GDP は世界 7 位であったものが、2010 年には第 4 位、2020 年には日本を追い越して世界第 2 位になる」と述べたが、実際にはそれよりも早く 2010 年に第 2 位になった。2035 年の中国、2050 年の中国を皆さんはどうお読みになるだろうか。

### **石井幸孝様 : 学会元顧問 元 JR 九州 社長、九州中国研究会顧問**

九州の福岡から来ました。2011 年九州支部が独立して以降、本部と九州の双方の顧問となり、橋渡しをさせて頂いている。

私にとっての中国との関係は元伊藤忠商事の瀬島龍三さんである。数十年在籍した国鉄、或いは JR で仕事をしてきたが、35 年前に中曽根首相の行政改革の時、その目玉である「国鉄分割民営化」の時には国鉄の役員をしていた。瀬島さんには行革のブレーンとして国鉄改革をご指導頂いた。その後 JR 九州の社長になったが、九州に行くと、見えるものが丸の内からとまるで違う事に気付いた。東京は遠く、上海がまるで近い。分割になったら、中国と交流しなければならぬと強く思った。そこで、瀬島さんは伊藤忠商事の幹部なので、相談したところ、中国に連れて行って貰う事になり、北京の鉄道部や経済界の幹部をご紹介頂き、以来、中国とのお付き合いが始まった。上海駅と東京駅との姉妹提携に始まり、交

流、観光、ビジネス、技術交流等様々なことを行った。また、地域も吉林省から雲南省まで中国中、幅広く交流してきた。

ところで、ここで「物流」について考える。鉄道の歴史を遡ると道路の歴史になり、秦の始皇帝が2千数百年前に世界初の高速道路を作って、物流の基礎を築いた訳である。

いきなり今日の問題で恐縮だが、コロナ禍の2年半で、分割したJR各社は大変な経営危機に陥った。それは何かといえば、出張しない、出勤しない、鉄道に乗らなくなった。特に、新幹線がガラガラになった。新幹線にお客が乗らなくなることは、元々人口減少やIT化でそうなるという予測はあったものの、それが一気に早まったという事である。そこで、旅客が乗らないのなら、それに代わるものとして「物流」が今日的な課題となった。ここから新幹線物流が始まる。サプライチェーンをよくするために、遠距離の食料輸送に今後大きく貢献するのでは言われている

実は、中国も同じ問題を抱えている。鉄道輸送は旅客に頼る時代は終わり、物流の高速化をしっかりと進めなければならないというのが世界的な課題となっており、中国の「一带一路」も今日のシルクロードであり、ヨーロッパとアジアの物流問題である。こうしたことから今、国鉄改革の第2ラウンドをこれからやろうという事を国交大臣、政府要人と話をしている処である。

最後に、最近2週間前に中公新書から「国鉄～日本最大企業の栄光と挫折」として上梓したので、是非本屋で手に取ってみて欲しい。

## 青木俊一郎様：当学会顧問、関西日中関係学会前会長、元パナソニック中国

**「日中関係学会と私」(続き)**

②オンラインでのご発言者

	<b>青木俊一郎様</b> ：関西日中関係学会元会長、当学会顧問 神戸市出身。1963年大阪外国語大学中国語学科卒、同年松下電器産業(現パナソニック)に入社。1979年松下電器中国代表事務所所長、94年松下電器(中国)総経理。2003年日中経済貿易センター理事長等歴任。
	<b>原田泰浩様</b> ：東海日中関係学会理事、当学会評議員 東海日中貿易センター相談役、愛知県日中友好協会副会長

③口頭でメッセージを紹介：ご欠席の方で、口頭でメッセージを寄せられた方、ご寄稿頂いた方々を紹介。

	<b>藤野文昭様</b> 元伊藤忠商事常務 元当学会副会長
	<b>佐藤 嘉恭 様</b> 元駐中国大使 元当学会副会長

## 代表

私は中国での滞在が長いですが、1979～2000年、松下電器(当時)の現地事業に携わった。それ以前には私は台湾の事業をやってきた訳だが、1979年にトップの松下幸之助氏と鄧小平さんが大阪の松下電器の工場で会談し、「21世紀はお互いに手を取り合っ

てやっぺいこう」と握手をした事で、松下グループとして、中国の事業を始めるに当たり、私がまず北京に入り、

事務所を設立することになった。

以後3回ばかり松下幸之助氏/鄧小平さんと会談することがあったが、1986年末には北京松下クラブブラウン管合弁会社が出来上がり、日本企業としては初の100億円を超えるプロジェクトがスタートした。中国からの研修生も半年間受け入れて準備をし、北京工場を開業したのが1989年6月3日であった。その翌日6月4日にいわゆる「6・4事件」(天



安門事件) が起こったが、大使館より「日本人は帰国せよ」という通達があったにも拘わらず、我々は「帰らない。帰ったらこのプロジェクトはおしまいになる」と主張して帰国せず、合弁会社のブラウン管製造を開始した。松下幸之助氏には、やっと鄧小平さんとの約束が果たせたと喜んで貰えたが、開業前の4月に94歳で亡くなられた。プロジェクトは中国側からも高く評価頂き、その後グループ各社が続々中国進出した。成功した物もあれば失敗した物もあるが、松下グループとしては中国の発展に大いに貢献したと思う。

私は関西日中関係学会の4代目会長を2015年から4年間務めたが、こうした松下幸之助氏と中国との関わりがあるので、2019年の学会総会が大阪で開催された時は、会場からバスで30分のところにある松下記念館を総会出席の皆様に参加頂いた訳である。

我々関西日中もこれからもドンドン発展していきたいと考える。ご支援よろしく申し上げます。

### 原田泰浩様 : 当学会評議員、東海日中関係学会理事

(体調不良のため急遽ご発言辞退)

(司会) スライドに下面に顔写真をお出ししているが、本日諸々の都合で会場にお出でになることが出来なかった方で、電話、メールで、皆様によりしくお伝え願いたいとのメッセージを預かっている二名を紹介する。

**藤野文吾様**：元伊藤忠商事常務として、伊藤忠の中国ビジネス、というより、オールジャパンの対中ビジネスをリードされ、当学会の副会長としても大活躍頂いた。今日は是非参加して皆様とお会いしたいが、高齢のために足が弱くなり参加が叶わない、皆様によりしく、と電話で連絡を頂いた。

**佐藤嘉恭様**：元中国大使で、当学会の副会長として、学会の発展に大きなご貢献を頂いたが、今回のシンポジウム開催には、病氣ご療養中で、出席できない、皆様によりしく、とメールでメッセージを頂いた。(注：佐藤嘉恭様は、兼ねて病氣療養中のところ、9月6日ご逝去されました。享年87歳。訃報に接したのが、9/12のため皆様へのご連絡が遅くなりました。ご冥福をお祈りいたします。)

## 6. 若者からの発言 (宮本賞受賞者から見た日中関係学会)

### **6. 若者の眼から見た日中関係学会 ～宮本賞受賞者からの発言**



**方淑芬さん(第4回最優秀賞):**

2015年当時日本大学商学部3年  
受賞テーマ: 日中経済交流の次世代構想～華人華僑の新しい日本展開を巡って(グループ受賞)



**南部健人さん(第9回最優秀賞)**

2020年当時北京大学大学院中国語文学部  
中国近現代文学専攻 博士課程前期終了  
受賞テーマ: 老会の対日感情の変化～「日中友好」を再考する～

(司会) 当学会では、2012年から「宮本賞学生懸賞論文募集」を開始し、今年で11年目になる。且つての受賞者の皆さんが、日中関係学会、及びに日中関係に対してどのように視ているか、お二人の受賞者の方に登場頂いて、お話し頂きたい。

### 方淑芬さん：第4回宮本賞最優秀賞（日大商学部グループ受賞）、現在起業中

2015年の第4回宮本賞で「日中経済交流の次世代構想～華人・華僑の新しい日本展開を巡って～」で最優秀賞を頂いた。受賞後、加藤様（学会副会長）より紹介を受けNHKのラジオ番組出演を、田中先生（当学会理事）より「中国塾」での発表機会を、また日大商学部長賞を頂くなど、様々な場でお誉めの言葉を頂いて大変光栄であった。当時の私は将来の自分に対して迷っており、自分が認められたことで自信が持てるようになった。受賞した論文テーマは「在日華僑」だが、私自身3年前に起業した。振り返ってみると宮本賞受賞をきっかけに自分の人生が上手く回るようになったと感じた。私だけではなく、受賞した仲間たちも得るものが多かったと思う。今回全員から話を聞けなかったが、以下5名の意見を紹介する；

・同グループで受賞し、今北京にいる関野憲さん：「学生時代、留学生の人たちと切磋琢磨して論文作成に打ち込んだことが第一に浮かんでくる。中国人の皆さんが自分のネットワークでの知り合い等を通して企業にアポをとり、日本人と中国人が協力して多くの企業を取材させて頂いた。未熟な活動であるにも関わらず、各企業の活動を紹介する事で日中友好への貢献が認知されてうれしい。今社会人として何とかなっているのも、この時の経験が有ったお蔭と感謝している」

・第6回で特別賞を受賞した中島大地さん：「日中交流に関心のある多くの人たちとの出会いの場が出来て、大きな収穫であった。様々な討論に参加でき、新しい発見があった」

・第6回で特別賞を受賞した朱杭珈さん：「先輩の皆さんのお蔭で、宮本賞を受賞でき、4年間日中間のあるべき姿を考えさせられ勉強になった。理想の実現までには様々な課題があると思うが、身近な一つ一つから相互理解を進めていきたいと考えている」

・第6回で特別賞の陳星竹さん：「宮本賞の皆様には、学生時代からお世話になり、先輩後輩からいつも良い刺激を受けている。今社会人として「日中関係」は切っても切れないテーマなので、これからも主体性を持って日中関係を考えたい」

・第6回で優秀賞受賞の山本晟太さん：「社会人になり、中国との関りが薄くなる中で、中国への興味・関心を保ちつづけられたのは日中関係学会のお蔭。現在中国の大学院で研究に従事する立場になった。色々勉強させて頂きたい」

以上だが、宮本賞を通じて、お互いに知らない日中双方の学生が集まり、意見交換をすることで相互理解が深まった事、宮本会長、事務局の皆さんに感謝を申し上げたい。

### 南部健人：第8回宮本賞最優秀賞（当時北京大学大学院中国語文学部博士課程前期）

ご出席の日中関係の最前線でご活躍された諸先輩の前でお話できる事、光栄である。私は第9回宮本賞で「老舎の対日感情の変化～『日中友好』を再考する」で最優秀賞を頂いた。1991年生まれの31歳で、2012～14年創価大学と北京大学のダブル・ディグリー

一で2年間を過ごし、大学卒業後2016年北京大学中文系修士課程に進学した。2019年12月に修士論文の口頭試問を終えて日本に完全帰国した数週間後に、武漢で原因不明の感染症が発生した。

在学中、同年代の中国人からの質問に種々問いかけられた。日本の古事記の「三種の神器」とは本当に存在するのか?とか、私が黒澤明監督の「夢」を観て感動した、というと、「本当のヒューマニズムは『檜山節考』だろう」との渋い回答。彼らは、大学で日本語を専攻するのではなく、それぞれの専門をもっている。

ここで言いたいことは、中国人の若者は我々が思っている以上に日本文化をよく知っているし、日本文化の深い処に注目をしている、という事だ。第9回宮本賞でも夏目漱石の漢詩に注目した中国人学生がいたように、日中関係学会がこうした日本に関心を持っている中国人学生のプラットホームになっているのは素晴らしい。

それにつれ、危惧するのは果たして日本の若い世代に中国に対して深い関心と理解を持っている人がどれだけいるかという事である。例えば、中国の魯迅以外の小説家を何人挙げられるか?あるいは、現代中国の映画監督を3人以上挙げろと言ったら挙げられるか?中国人の学生が持っている旺盛な好奇心に比べると「知の不均衡」があるのも事実ではないだろうか。

友好を築くうえでは、お互いをよく知り合う事が大事で、そのためには政治や経済の能力も必要だが、それと同様、相手の良質な文化を知ること大切だと思う。深い文化は深い思考の中からはしか生まれてこない。

私は大学院を卒業して2年ほど中国関係の雑誌社の仕事をしていたが、今年の春からフリーなライターとして仕事をしている。まだ駆け出しで何もできないが、中国や東南アジアの若い中国人や華人のユニークな活動をしている人にインタビューをして記事を書いている。将来的には中国の文芸作品の日本語訳のサービスをしたい。

諸先輩の開いてくださった日中関係の道をさらに大きくしていけるよう、微力ではあるが努力していきたい。

## **7. 会場からのご意見**

(司会)、お申込みの際に、ご意見を伺っていた方に優先的にご発言頂く。

### **藪内正樹様 : 敬愛大学教授**

申込の際、コメントを書かせて頂いた主旨は、先ほど大久保さんが岡崎嘉平太さんのお話をされたことに関係する。1982~1987年、私はJETRO(日本貿易促進機構)に所属し、日中経済協会に出向していた。そこで、午前中いつも岡崎嘉平太さんのお話を聞く機会に恵まれたが、岡崎さんは日中国交回復前の周恩来首相との会談の事をよく話された。それは、「中国は日本の侵略を恨んでいるが、日中の不幸な時期は極短く、一方、長い友好の時代があった。今後は日中が協力してアジアを強くしていこう。そうして、強くしたアジアで他の国を侵略するのではなく、侵略する者があれば一緒に手を取り合っ

て撃退しましょう。如何ですか、岡崎さん！」というものであった由。岡崎さんはその会談の日の事を人生最良の日と繰り返し言っておられた。

またある時、大日本愛国党の赤尾敏総裁が事務所を訪れ、「中国共産党と友好などけしからん！」と言って面会を求めてきた。それから小 1 時間、周りが息をのんで見守っている中、赤尾敏氏が会談を終えて出てきて、「よくわかりました。頑張ってください」と言って帰って行った。社会主義とか資本主義という事ではなく、日中が協力してアジアを強くしていこうという処で、一致点を見出したものと思う。

日中関係学会も思想・信条が異なっても一致できる場所でお互いに協力し合おうという点では同じだと私は思っている。

私見だが、先の大戦では、当初日本は欧米列強の侵略に対して戦うという志があったが、途中から欧米に代わる支配者になろうとした処に誤りがあったように思う。「アジア」の兄弟としてという周恩来首相と岡崎さんとの一致点、こうした事を如何に若い人に伝えていくかを考えた時に、宮本賞は世代を引き継ぐという意味で素晴らしい企画であると思う。

## 8. まとめ及び、日中関係学会のこれから 10 年：林千野 当学会副会長

### 8. まとめ及び、 日中関係学会のこれから10年

林千野 副会長



2019年から日中関係学会副会長、宮本賞実行委員長。元双日株式会社秘書部担当部長、中国・北東アジア担当。1980年代初めに北京語言学院(現語言大学)留学。1985年日商岩井(現双日)入社。1999年米国戦略国際問題研究所(CSIS)にビジネスフェローとして在籍。2002年~2006年双日中国会社(北京)駐在。

#### 15: 50シンポジウム終了 10分移動休憩

私は父が友好商社の創業をした関係で早くから、「中国は今後すごい国になる。日本の大学に行くより中国に行って勉強せよ」と言われ、高校卒業後北京語言学院に留学した。しかし、当時の中国はすべてが日本より 20~30 年遅れており、私は父親の言葉を疑って、「お父さんは生活したことがないから中国の事を分かっていない・・・」と文句を言った。すると父が悲しい顔をして、「お前

は何もわかっていない。中国はこれからすごい国になるのだ」と言った。しばらくして父は急逝してしまったが、今となっては父に「お父さん、ごめんなさい。中国はすごい国になったよ」と言いたい。

日中関係学会との関係でいえば、2012 年尖閣問題が大きくなって以来、中国から人が来なくなった頃、当時の副会長の藤村さんから誘われて事務局の仕事をするようになった。そして、2019 年には宮本賞実行委員長も仰せつかり、引き継いだ。その仕事の煩雑さと量で、お正月にも自宅で仕事に追われ、家族から「ブラック・ボランティアではないか!？」と言われる始末であった。

日中関係学会の今後の 10 年を考える時、NHK のドキュメンタリー「中国の改革開放を支援した日本人」に登場した武吉次朗さん（日本国際貿易促進協会）の「次の世代にバ

トンタッチする」という言葉がとても響いた。先輩諸氏からバトンを渡され、それを次の世代に渡すのが自分たちの役割だと思っている。これからどういう10年になるか宮本会長が冒頭言われた、1970年代は「平和と不戦」の年であったとすれば、これからも、仮に悪化したとしても「平和と不戦」は死守して次の世代に渡さねばならないことを確認した。

当学会の会員に占める学生の比率は16%であるが、卒業して社会に出ればどうしても続けていくのは難しくなる。しかし、社会に出て一定の経験を積んで再び学会の活動に戻ってくればありがたい。

今日素晴らしい発言してくれた方淑芬さん、南部健人さん始め宮本賞受賞の皆さん！皆さんが日中関係学会というプラットフォームを通じて活動を盛り上げていこうと思ってくれたその時は、いつでもバトンを渡します！

以上（文責：事務局国吉澄夫）

添付1：PDF資料「基調報告・日中関係学会30年の歩み～多くの方々に支えられて」（藤村幸義）

添付2：PDF資料「東海日関係学会の歩み」（川村範行）



会場参加者とオンライン参加者との集合写真